

平成24年度 文部科学省

「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」採択事業

産官学地域協働による人材育成の

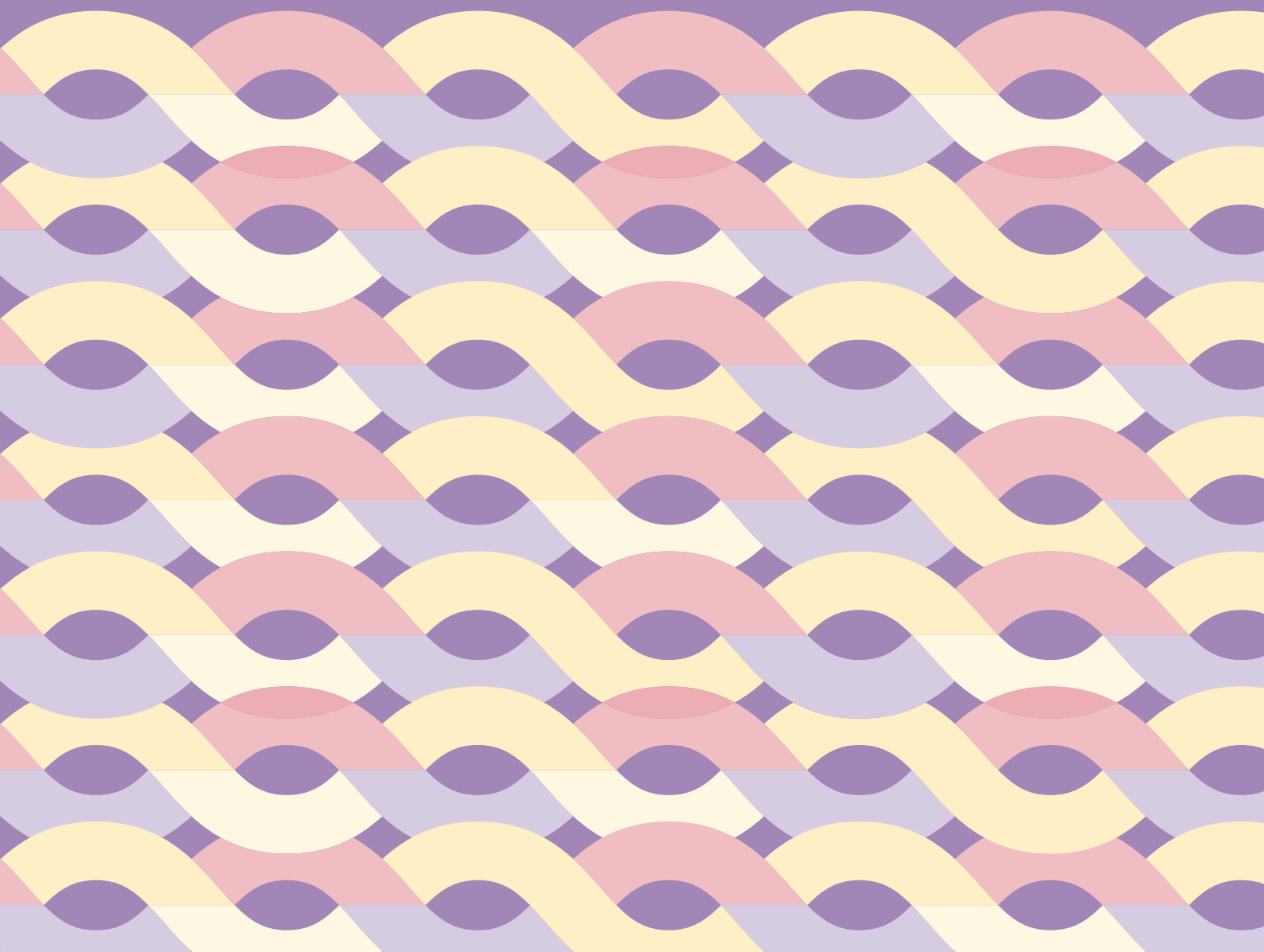
環境整備と教育の改善・充実

大阪音楽大学

大阪音楽大学短期大学部

年次報告書

大阪音楽大学 大阪音楽大学短期大学部 日本語ライティング支援室



## 本学の紹介

大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部をご紹介します。

世界音楽 並ニ  
音楽ニ関連セル諸般ノ芸術ハ  
之ノ学校ニヨツテ統一サレ  
新音楽 新歌劇ノ  
発生地タランコトヲ  
祈願スルモノナリ

### 「建学の精神」

大正4(1915)年、大阪音楽大学は永井幸次により創立されました。

以来、関西で唯一の音楽専門単科大学として、高い音楽性と演奏技術を身につけた、たくさんの「音楽人」を社会に輩出しています。

クラシック音楽の領域にとどまらず、ジャズ、ポピュラー、邦楽、ミュージカルなど、学生の意欲に合わせて学ぶことができる音楽大学であり、演奏技術はもちろんのこと、音楽から学んだことを糧にして、社会でちから強く生きる「音楽人」の育成を目指しています。

学内には、本格的なオペラを上演できるザ・カレッジ・オペラハウスや、在学生ならば原則的に無料で使用でき、舞台機構も合わせて学ぶことのできるミレニアムホールを擁しており、本物の音楽に触れながら自分の学習成果を発表できる、充実した設備を整えています。

また、定期的に開催するコンサート、オペラ公演、社会人向けの音楽講座、小・中学校での本学学生による演奏指導など、多数の地域貢献活動を通じて、音楽によって地域とつながる取組にも力を入れています。

## ご挨拶

大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部  
理事長 中村 孝義

かつて大学は、ある意味で社会から隔離された「象牙の塔」であった。しかし今は違う。大学はそれが存立する地域(住民や自治体)や産業にとって、精神的基盤となったり文化的背景をなす存在となつて、それらにより豊かにする起爆的存在であることが求められている。地域の人々や産業界が求めているものを的確に汲み取り、大学が培ってきた豊かな知や技を背景に、しかるべき情報を提供、発信していかねばならない。それでこそ大学は地域や社会に根ざした磐石の知の殿堂となり得るし、大学で学び、大学が社会から求められているものに真摯に対峙し行動する学生たちも、地域や産業界との連携の意味や、就業することの意味をより深く修得することができるようになるのである。

大阪音楽大学では、過年度に文部科学省より「大学生の就業力育成支援事業」の採択を受け、学生たちの「事実にもとづく日本語ライティング能力」を高めるべく、様々な事業を展開してきたが、新たに「産官学地域協働による人材育成の環境整備と教育の改善・充実 事業」に採択され、今まで目指してきた地域や社会との強力な連携をもとに、より多くの人々に、音楽文化の奥深い魅力を伝え、地域を豊かにし、産業を活性化するお手伝いをしてきた。こうした活動が学生の教育の充実、改善に繋がっていることはすでに言うまでもない。今後も本学が目指す「ちから強く生きる。音楽人」をより多く輩出するため、なお一層の努力を展開していきたいと考えている。みなさまのご理解とご協力を心よりお願いしたい。

事業取組担当者  
教養教育部会 教授 山下 豊

2012年ほど、政治がリアルに感じられたことはなかった。いうまでもなく、事業仕分けに続く、政策仕分けがあつたせいである。文部科学省も大変だったが、本学はまさにどうなる?という状況のなか、困惑の極みに戸惑うばかりであった。幸いにも、大阪府立大学を中心として14大学が集まり、今回の新たな事業が始まった。まだ開始して数ヶ月だが、意外にも新事業の展開は速度を増しながら、期待以上の成果をあげられるのではないかと、という想いが各大学の関係者には確かにある。そういうふうに私には感じられる。

本学は、大学音楽学部と短期大学部の2大学として、それぞれにプログラムの採択を受けた。稼働させるスタッフには、従来の日本語ライティング支援室にいた信頼できるスタッフ5名に加えて新たに1名を採用した。この6名の発想力と実行力に、この新事業の成果の行方を託せたことは、私にとって何よりの安心材料となつた。

しかし、問題は、本学の学生たち自身にある。彼らは音楽という芸術に生きること、つまり一般的な意味でいう社会人(正規雇用労働者として会社に就職する)とは異なる生き方を望んでいる。もちろん一般企業への就職を目指す者もいれば、学校教員や音楽教室の講師を目指す者もいるが、正規雇用への就職だけが全てではない。音楽家になりたいという夢が破れ、時期遅れで就職活動へ参入する者も少なくはない。ここには、音楽を目指して生きる学生たちの困惑と葛藤のせめぎあいがある。

そうした学生たちを育てていく大学として、では、私たちには、何ができるのだろうか。この2つのプログラムを書いた私の本当の目的は、その問いと学生たちの想いに寄り添いながら、就職における何らかのモデルを提示することにある。私は、ある人の言葉「学生は練習しているプロフェッショナルである」を信じている。音楽大学に学んでいる学生は、すでに音楽のプロである。だからこそ彼らの日々の練習には何ものにも代え難い意義がある。しかし、演奏家として生活していくことだけが全てではない。むしろ音楽のプロとして、身につけた音楽の可能性を、社会で働くことの中でどう実現していくか、その具体化の方法として仕事に就く、働くということがあるのではないか。音楽を学ぶことで身につけた経験の知を基盤として、自分をどのように社会で役立たせることができるのか、問いの意識を持ちながら社会で働くこと。そうした新しい働き手になつてほしいという願いがある。社会を少しでもより良い方向へ変えていこうとする働き手であること、そして社会もまたそうした働き手だからこそ必要としてくれること。音楽を学ぶ学生とより良くあろうとする社会の協働の中にある仕事、働き方、生き方のモデルを見つけた。

このプログラムが、音楽のプロとして学ぶ学生たちにとって何らかの気づきとなれば、と願っている。



### 学生数 ※平成25年1月1日現在

大阪音楽大学 809名  
大阪音楽大学短期大学部 289名  
大阪音楽大学音楽専攻科 26名  
大阪音楽大学短期大学部専攻科 24名  
大阪音楽大学大学院 34名  
計1182名

### 大阪音楽大学 音楽学部 音楽学科

作曲専攻  
音楽学専攻  
声楽専攻  
ピアノ専攻  
パイプオルガン専攻  
管楽器専攻  
弦楽器専攻  
打楽器専攻  
クラシックギター専攻  
邦楽専攻  
ジャズ専攻  
電子オルガン専攻  
演奏家特別コース(ピアノ/ヴァイオリン)

### 大阪音楽大学短期大学部 音楽科

作曲コース  
声楽コース  
ピアノ・コース  
管楽器コース  
弦楽器コース  
打楽器コース  
邦楽コース  
クラシックギター・コース  
ジャズ・コース  
ポピュラー・コース  
電子オルガン・コース  
ミュージカル・コース  
ダンスパフォーマンス・コース

### 大阪音楽大学 音楽専攻科

作曲専攻  
声楽専攻  
器楽専攻

### 大阪音楽大学大学院 音楽研究科

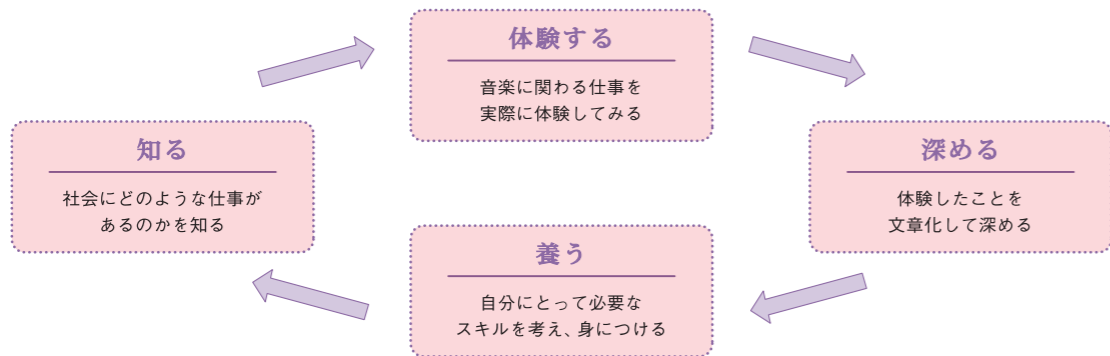
作曲専攻  
声楽専攻  
器楽専攻

### 大阪音楽大学短期大学部 専攻科

音楽専攻

# 本学の学びのサイクル

本取組における学びのサイクルです。



**学びのサイクルをつくる**

本取組では、上図のような学びのサイクルにもとづいて学生支援を行っています。本学では、学生支援として行っている取組が多岐に渡っているため、このサイクルを意識することで、個々の取組のねらいを明確にするようにしています。また上図をふまえることによって、現在実施できている支援と、これから取り組んでいかなければならない支援とを明らかにしていくことも目的です。学びのサイクルは、「体験する」「深める」「養う」「知る」の四つに分かれ、それぞれについて、日本語ライティング支援室・音楽の仕事情報館・キャリア支援センターの協働によるサポートを行っています。

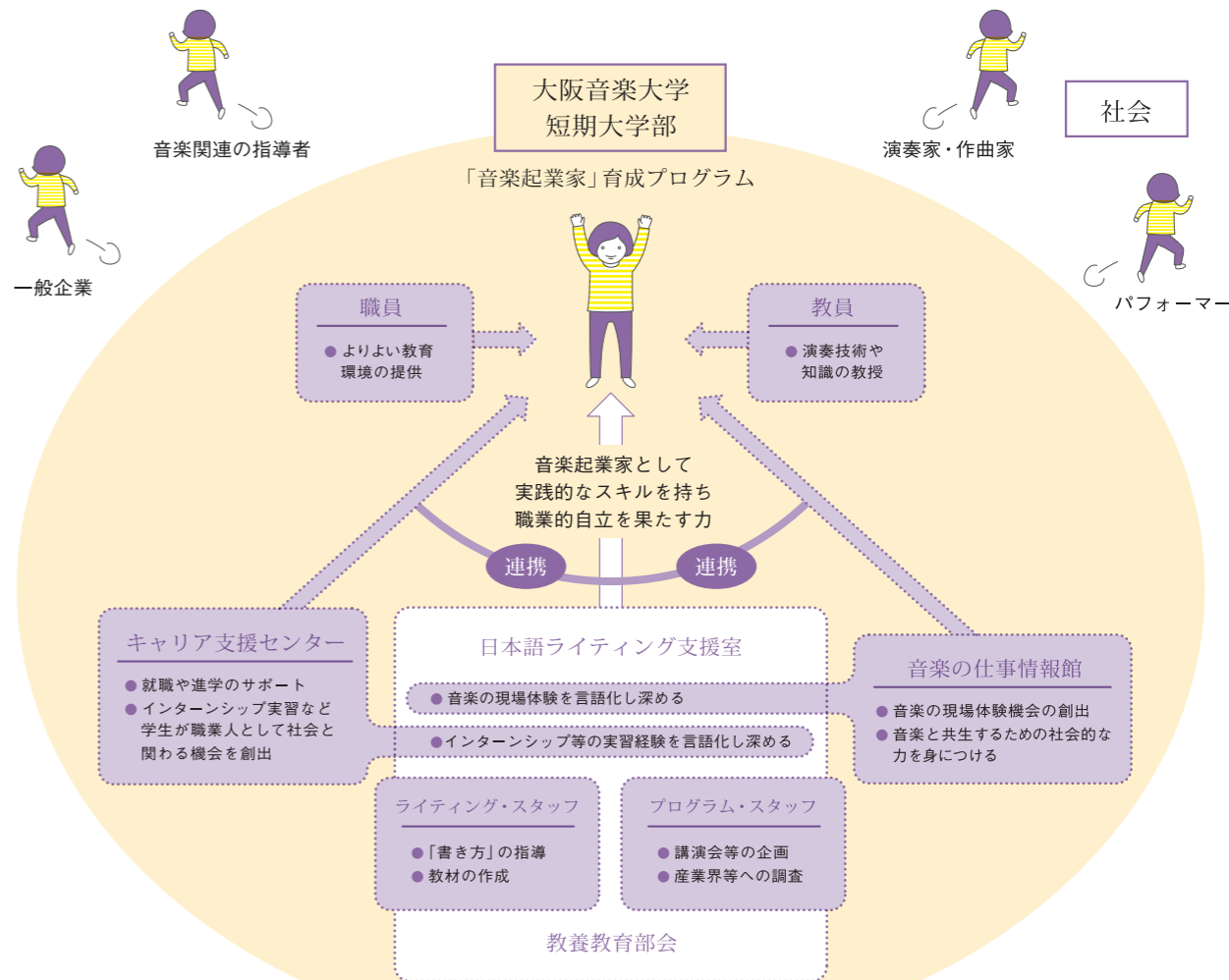
## 学びのサイクルをつくる

## 日本語ライティング支援室について

本取組の中心となる日本語ライティング支援室は、教職員6名のスタッフで構成されています。スタッフはプログラム実施とライティング支援の二つの面から活動を行っており、本取組のための様々な企画・実施するほか、月曜日から金曜日まで常時支援室を開放し、文書作成に関わる学生からの相談を受け付けるなどしています。平成24年4月から平成25年2月に対応した164件（大学・短期大学部含む）の相談の種類をあげると、授業で課されたレポートの作成はもちろんのこと、演奏会で配布するプログラムノート（楽曲解説、チラシに掲載するプロフィールの書き方、挨拶文、チラシそのものの作り方、伴奏の依頼や演奏会の招待状などの手紙、演奏会のための企画書、名刺作成、また就職活動を行っている学生のためのエントリーシートや課題作文の添削などがあります。授業・音楽活動・就職活動に渡るそれらの相談は、本学において、学生の求める支援が多岐に渡っていることを示しています。



# 大阪音楽大学短期大学部の取組



本学短期大学部は2年間の学修課程となっており、その間に音楽専門教育と教養教育、キャリア教育の三つの課題を効率的に課す必要があります。また、特性の異なる13の専門コースがあり、希望進路に多様性が見られることが特徴です。学生の多くは演奏家・パフォーマーやそれぞれの専門ジャンルにおける指導者を志望していますが、そのための準備を適切なタイミングで始められる者は少なく、希望進路をどのように決めればよいかわからない、そもそもどのように自分の能力を社会と結びつけばよいかイメージできない、といったケースが見られます。

この状況をふまえ、本取組では、学生の進路モデルとして演奏家・パフォーマーと音楽関連の指導者の二つを中心に据え、そこで必要と考えられる能力を「音楽起業家」スキルと捉えて、実践的に養うための取組を行っています。

具体的には、まず大学で行っている『自立する音楽人』育成プログラムを短期大学部にも導入して、音楽家が必要とされる社会の現場を学生が体験し、その記録化によって体験を深めていくことを促します。またそれに加え、「音楽起業家」として必要なスキルを身につけるために、経営知識などを学ぶ実践的な講座や、基礎的な文書作成指導を行っています。さらに、教職員に対する意見調査および産業界等に対する人材ニーズ調査を行い、その成果を学生に伝えていくことで、社会にどのような音楽の仕事があるのか、どのような力を身につけていけばいいのか、具体的にすることも促していきます。

これらの取組は、「日本語ライティング支援室」が中心となり、学びの基盤作りから実践まで、ライティング指導とプログラム推進の両面から柔軟に進めていきます。そして、「音楽の仕事情報館」およびキャリア支援センターと連携しながら、音楽を学んできた学生が、自らの能力を活かして職業的自立を果たすことができるようになるための支援を行っています。

## 活動報告

本事業のための活動をご紹介します。



## 体験する

## 音楽の仕事情報館

本学では、学生の就業体験プログラムとして、二つの取組を行っています。一つ目は、音楽の仕事情報館によるコーディネートのもとで、学生が企画者・演奏者として地域や企業等における「音楽家の仕事現場」を体験するというものです。たとえば、ミント神戸にご協力いただき商業施設で演奏会を企画したり、有馬温泉観光協会や近畿大学等と連携して、温泉地を活性化させるコンサートを企画したりするといった取組です。

将来、学生が音楽家として職業的自立を果たすには、演奏技術だけでなく、音楽の需要を読む力や、個人事業主としての知識が必要です。この取組では、学生が社会から企画者・演奏者として依頼を受け、客層を考えながら出演者や曲目を決め、広報や機材の手配等を行い、実際にステージを作り上げていくことで、一連の実務を体験できるようにしています。

また、「音楽家の仕事現場」といっても、なぜそこに音楽が必要とされているのかは、現場ごとに異なっています。賑わいの演出が求められているのか、静かな演奏が求められているのか。この取組では多種多様な企業等にご協力いただき、出演者が1〜2名の小規模な企画から、50名ほど参加する大規模なものまで、様々な現場をコーディネートしています。学生は、課外活動として1年生から自由にそれらに参加することができ、経験を積み重ねています。

## 平成24年度 協力団体・企業等

株式会社ダイヤモンドソサエティ／有馬温泉観光協会／ミント神戸／ECC国際外語専門学校／豊中市／宝塚市立手塚治虫記念館／株式会社山田洋行／大阪電気通信大学／梅田地区エリアマネジメント実践連合会等

## インターンシップ実習

二つ目の就業体験プログラムは、主に音楽関連企業や団体等にご協力いただいで実施している、インターンシップ実習です。夏期と春期の2回、定期的の実施しており、毎年50名前後の参加者があります。普段は演奏の実技を学んでいる学生が、コンサートホールの運営を学んだり、音楽教室の講師を目指している学生が、実際に教育業務を体験したりすることで、企業や社会の実情を知り、仕事に対する興味や関心を高め、適性を客観的に考えることができるプログラムとなっています。インターンシップ実習に参加した学生は、進路を具体的に考えることができるため、その後の就職活動も積極的に行うことができます。

## 平成24年度 協力団体・企業等

株式会社清業楽器／三木楽器株式会社／ヤマハ株式会社／株式会社河合楽器製作所／有限会社大阪アーツ協会／公益財団法人日本センター／文響楽団／公益財団法人尼崎市総合文化センター／公益財団法人びわ湖ホール／財団法人住友生命社会福祉事業団いずみホール事務局等



↑インターンシップ実習の現場

## 深める

## 音楽の仕事情報館×ライティング

体験で学んだことを深めさせるために、本学では平成23年度より、音楽活動を文章に書き、記録化する取組を始めました。音楽の仕事情報館と日本語ライティング支援室の協働によるこの取組は、平成24年7月、日本学生支援機構による審査にて「特に優れている」「音楽関連以外の業界に就職しても生かされるだろう」と評価されています。

本事業でもそれを継続し、できるだけ多くの学生の参加を促すこと、また学内外に記録を公開し、質を上げていくことを目指しています。

具体的には、音楽家としての仕事現場体験において、学生は「演奏会記録」を作成します。客数や選曲などの事実に加え、選曲理由、反省点と改善方法、自分の強みや弱みについての発見など、一つ一つ文章にして書き込んでいきます。



↑イベント後のふり組み会



↑「有馬温泉ゆけむり大学2012」演奏会記録用紙

## キャリア支援センター×ライティング

実習記録の作成は、インターンシップ実習でも行っています。こちらも事前のオリエンテーションや事後の報告会を実施し、学んだことを深めるようにしていますが、それに加えて、実習前から各学生に対する個別の成績評価をいただくことで、学生の現状と実際に企業が求めている人材との差を認識する機会としています。

学生にとって、インターンシップ実習は、普段接することの少ない、学外の社会人との出会いの場です。彼らの働く姿を見、彼らと話をすることで、自分に足りないものを考えるきっかけができます。社会人の客観的な視点による成績評価は、たとえ厳しいものであっても、学生にとって心に響く助言となります。社会から評価を受けて、今後の学びにつなげていくことは、実習において必須のプロセスといえます。

現在、このような外部からの評価の導入は、インターンシップ実習のみ行っていますが、同様の仕組みを音楽家としての仕事現場体験でも構築していくことが課題となっています。また逆に、音楽の仕事現場体験で作成している「演奏会記録」のまとめ冊子について、インターンシップ実習でも同様の形を取り入れ、より積極的に社会からの評価をいただきながら、学生の成長を支援していきたいと考えています。

体験を通じて、自分に何が足りないのか見えてきた学生のために、本年度は次のようなスキルアップ講座や書き方指導を行いました。

## MC 講座

平成24年5月18日(金)・7月2日(月)

音楽の仕事情報館スタッフが講師となり、ステージでのMC(曲紹介などの短いトーク)について60分の講座を開催しました。講座は基礎編・実践編の2回を実施し、それぞれ30名前後の参加がありました。

## 学生の感想

自分のMCに何が足りないかがわかりました。これから発声練習を実践してみたいです。



## PV 講座

平成25年1月16日(水)

ビジュアルアーツ専門学校大阪より講師の三丸聡さんをお招きし、90分の講座で、音楽と映像を組み合わせたPVの作り方を講義していただきました。

## 学生の感想

映像でここまでアピールできるのか、と驚いた。実際にパソコンで編集する体験ができて、ものすごく楽しかった。



## PA 講座

平成24年11月6日(火)

音楽の仕事情報館スタッフが講師となり、スピーカーやミキサーなど、PA機器の使い方について60分間の講座を開催しました。

## 学生の感想

電子オルガン・コースで、このような機材のことを知りたかったので、とても勉強になりました。まずは「8の字巻き」を覚えたいと思います。



## 名刺作成講座

不定期開催(平成24年度は8回)

日本語ライティング支援室スタッフが講師となり、30分の講座を開催しました。名刺は社会人としての第一歩。音楽家用、就職活動用など、自分の目的に応じて掲載する情報を選び、作っていきます。

## 学生の感想

名刺がこんなに奥深いものとは思っていませんでした。作った名刺はボランティア先で配っています。



音楽を学ぶことで身につけた力を、社会でどのように活かしていけばよいか、知識が足りないために、行動することができなくなっている学生も少なくありません。学生の視野を広げ、意欲を高めていくために、多様な生き方を「知る」ための支援も行っています。

## 学生のための広報誌

日本語ライティング支援室では、平成23年度より、学内向け広報誌としてフリーマガジン『writing note』(B6判、12〜16頁)を発行しています。「書くこと」に関するハウツー記事のほか、インタビューや学生座談会などを掲載し、本学の学生たちの多様な価値観を紹介していくことで、学生自身が視野を広げるきっかけになればと考えています。本年度は、第7号〜第9号まで3号を発行しました。

## 『writing note』主な記事

第7号 平成24年4月	・特集「音大生の手」 ・学長あいさしお作文 ・インタビュー「大音のめぐみさん」
第8号 平成24年11月	・特集「学外で演奏する時の選曲座談会」 ・インタビュー「大音のめぐみさん」 ・ライティング講座 「パソコン用のメールを使ってみる」
第9号 平成25年3月	・特集「教職支援室を紹介します」 ・特集「大音に集った!」 お土産コレクション2013 ・インタビュー「大音のめぐみさん」 ・日本語ライティング支援室ニュース



↑フリーマガジン『writing note』7〜9号の表紙



↑フリーマガジン『writing note』の中間

## 社会と音楽について考える講演会

また、音楽に関わる社会で活動している方を招いて、講演会を開催しました。本学学生にとって音楽は当たり前のもので日常にありますが、講演会を通じて、人と人々を結びつける芸術の役割というものをあらためて知り、何のために音楽があるのか、自分たちに何ができるのか、考える機会ができました。これからは様々な講師をお招きしていく予定です。

## 講演会

「紙芝居劇むすび ゆる〜く、でも、根っこには深く」

平成24年12月12日(水)  
〈講師〉石橋友美さん(「紙芝居劇むすび」マネージャー)  
〈同時上映〉映画「むすび」小菊さんに会いたい「むすび in 宮城」  
「むすび」は、日本最大の日雇い労働者の寄せ場であるあいりん地区、通称「釜ヶ崎」で活動している紙芝居劇のグループ。いろいろな人に助けられながら、紙芝居を通じて人と人が結ばれていく様子について、「むすび」のマネージャー、石橋さんにお話をいただきました。参加者は62名。講演後のアンケートでは、「初めて知る世界に衝撃を受けた」「考えさせられた」などの長文の感想が並びました。

チラシ作り指導・曲目解説の添削・  
企画書の書き方・手紙の書き方 など

上記の講座のほか、日本語ライティング支援室では、様々な文書の作成方法について、常時個別相談を受け付けています。相談は1人当たり平均40分で、相談件数は平成24年4月〜平成25年2月で164件です。

音大生にとって、文書作成が必要になる場面というのは、非常に数多くあります。演奏会を開催する際には企画書、ホール使用申込書、予算書、チラシ、プログラム冊子、アンケートなどの作成が必要になりますし、招待状などの手紙を書くこともあります。また、就職活動を行って行く学生は、エントリーシートや課題作文などを書く必要にも迫られています。日本語ライティング支援室では、各スタッフがそれぞれの得意分野を活かして、それらの相談を全て受け付けています。

たとえば、チラシ作りでは、演奏会の特徴や客層を考えて全体の雰囲気を決め、見やすいレイアウト、画像の著作権、印刷所への発注方法などアドバイスしています。学生の感想として、「チラシを作る前に客層を考えると、情報のグルーピングをしないと、これまで意識していなかったのが驚きました」といった声が多く、文書作成を通して、他者に「伝える」コミュニケーションの重要性に気づく者も少なくないようです。

また、実技を学ぶ授業科目の多い本学では、レポートや論文を書く機会が多いとは言えませんが、それらを書くことで身につく論理的思考力や説明能力は、どのような進路に進む場合でも有効です。日本語ライティング支援室では、授業とも連携しつつ、読み手に伝わる文章をきちんと書くための指導を行っています。

## 連携大学との合同フォーラム

本事業の特色である、兵庫・大阪・和歌山の14大学による連携体制を活かして、本年度は全大学参加による合同フォーラムを開催しました。本学からも教職員と学生が参加して、関西の産業界等で求められているリアルな人材像についてお話を聞き、また逆に、本学の特徴を知っていたくためのパネル展示も行いました。パネル展示は、学生自身が「音大生の1日」「音大生の就職」の二つの切り口から自分たちの現状をまとめ、発表したものです。今後とも、学生が自分自身を客観視し、自分自身について「知る」ことを促していきたいと考えています。

## 合同フォーラム 「みんなでつくる 明日の人材」

平成25年3月4日(月)  
「主催」本事業連携14大学  
「内容」パネルディスカッション「今、社会で求められる人材とは？」講演「社長はこんなことを考えてる!」/学生によるトーク企画「学生の本音」ほか

## 次年度の課題

「知る」ことについて、卒業後にどのような進路があり得るのか考えるために、ロールモデルとなる卒業生をもっと紹介してほしいという要望が教職員からあります。この要望にこたえること、また、本学が現在あまりつながりを持っていない業界の方にも講演をお願いするなど、学生がより広い視野のもとで職業的自立をイメージできるように、「知る」機会をもっと作っていくことが次年度の課題です。それと同時に、学生自身が社会について「調べる」力をも身につけられるよう、支援していく必要性も感じています。授業と連携しつつ、日本語ライティング支援室から、様々な支援を行っていきたくと考えています。

## 付・ヒアリング調査

先生方にお聞きしました  
～音大生にはどんな生き方があり得るのだろうか？～

### 調査背景と概要

本学の学生は音楽家・パフォーマーを夢見て入学し、音楽を専門的に学びます。学びながら、音楽を活かした仕事をしたいと考えることは自然なこと、一般的な就職という選択をしない学生も少なくありません。また、なかなか進路を見定められないという学生も多くいます。これには、音楽の世界ならではの事情も関係するのではないかと考えました。

本取組は、音楽を学ぶ学生が、自らの能力を活かして職業的に自立し、積極的に活躍できるように支援することを目的としています。そのために、音楽の世界で活躍し、現状をよく知る教員の方々に学生の進路について、ヒアリング調査を行いました。

以下では、調査から見えてきた音楽の仕事の現状と学生が進路を考えるための提案を掲載します。

期間	方法	対象
平成24年12月～平成25年1月	日本語ライティング 支援室スタッフによる 聞き取り(15分～60分)	各専攻・コースの教育主任の 先生方(26名)

### 音楽の仕事の現状

#### 音楽で仕事に就くことの難しさ

「音楽の世界での仕事というと、どのようなものがあるのでしょうか」とお聞きしました。先生方の回答として、「最初に挙げたのは「演奏活動をしてお金を稼ぐこと」でした。しかし、演奏活動のみで生きていくことは非常に難しいとの回答も同時にありました。そして、音楽に関わる仕事は、卒業と同時に就職先や生活の糧が得られるとは限らないこと、極端な場合には、専任の仕事に就くために、長い年月が必要なこともあるということも先生方の回答には見られました。

先生の声

- 歌、楽器にしろ、自分のやった楽器で生計を立てるとするのはかなり難しい。100%演奏活動で生活が成り立つ人というのは、日本で何人いるかというレベル。
- 音楽の仕事を得るには、すでに社会に出ている人のもとで雇ってもらおうというつながりがあっていく。お仕事を貰ってそこへ行って、演奏して、いい結果を出して、次へつなげていく。そういうのが演奏者の立場としては一番多いと思う。
- 音楽関係の仕事であれば、すぐに専任職に就くことは難しいので、バイトをしながら様子を見て、何年かかけて固めていくことになる。実際には演奏活動しながら、他の仕事をやる人が多い。それでも、ものにならないことだってある。
- 音楽の実技というのは2年や4年で答えが出るものではない。むしろ短大・大学を出てからどうするかが大切。卒業してからうまくなるという人もいる。その意味でも、卒業後すぐに職に就くという意識は業界で薄いのかもかもしれない。

### 音楽の仕事のかけもち

「短大や大学を卒業したあと、音楽に関わる方は、どのように生活をされているのでしょうか」とお尋ねしました。先生方からは、「音楽教室の講師やインストラクターをしながら、演奏活動を行う」、「演奏活動と他の仕事をかけもちする」といった声が多くありました。このような回答から、音楽と別の仕事をする、演奏活動においても一つのジャンルにこだわらず、多彩なジャンルに取り組むなど、「かけもち」が広く行われていることがわかります。このような生き方は、「一つで全部まかなうことは無理だから、いくつか足して『1』になれる」という先生の言葉からもうかがえます。

先生の声

- 音楽教室のインストラクターを週2日くらいやって、ライブハウスで演奏をして、レストランでも演奏をする。そうやって副業をして、生きているもの。ライブが自分のしたいことで、教える仕事で収入を得ているというのが大体的にかたち。
- 音楽教室で教えたり、振付を考えたり、振付を教えたりしながらダンサーやヴォーカリストとして活動する。それで評判がよければ仕事が続いていく。前向きな子は近いところで生きる道を見つけて、教えることもやっている。
- ジャズという音楽だけで食べていくことは、正直不可能。様々な機関で教師・講師としてレッスンをしたり、ジャズ以外の音楽を演奏するなどしながら生活していることは間違いない。そういうことはすべてやって、生活しているというのがジャズミュージシャン。
- 別の仕事で生活しながら、オーケストラのオーディションを受け続けて、正団員のポストを狙う人もいます。

### 進路を考えるための知識の不足

「本学の学生の進路に対する考え方は、どのようなものだと思いますか」とお聞きしました。先生の回答から、学生は、自分の学びとつながった進路がなかなかイメージしづらいこと、自分の仕事を探すための知識が不足していることが明らかになりました。

不足している理由として、現実としての音楽の仕事の少なさに加え、探すための方法や知識が提供される場や機会が少ないことが考えられるのではないのでしょうか。

また、先生方の回答には、音楽以外の仕事を探すときも、音楽での経験は役に立つはずだが、学生はそこには目が向かないという意見も見られました。

先生の声

- 学生は自分の技術習得など、目的意識ははっきりと持っている。しかし、それが直接、自分の卒業後の仕事にどう結びつくかとは多少距離があると思う。なかなかイメージできない。
- 短大は特に早いうちから進路を考える必要がある。しかし、具体的な進路イメージを持つている子は少ない。その理由は演劇で生きていく方法がわからないから。学生は演劇で生きていくことは大変だと理解していると思う。だけど、自分の進路として見たとき、「どこに行けばいいんだろう」と考えると、実際に行ける劇団は多くはないし、演劇の世界の情報を自分では探せない。
- 音大の学生は、ピアノや音楽の演奏で職に就きたいと思うがゆえに、他の仕事のことからわからない、知らないという状態だと思う。音楽の仕事以外でも音楽の経験を活かせるところはあつた。
- 進路を考える情報として、「音楽に関わりながら、普通の生活をしている人」のモデルがない。学生も知らないから、はつきりとした進路のイメージが持てないのだらう。

### 前へ進むためには

#### 自分の未来をイメージする

音楽の仕事に就くことの難しさ、学生が将来のイメージを持ってない、こういった問題について、「学生が自分の将来をイメージするために、どのようなことが必要でしょうか」と質問しました。先生方からは、「現実に音楽で生きている人のモデル」を示すことの必要性を挙げる声が多く出ました。

音楽家として華々しく活躍する卒業生の生き方については、大学案内やホームページ、広報物などから情報を得やすいのに対し、現実としてそのような道に進んでいない卒業生はどのような生き方をしているのか、学生に情報として伝えられていない現状があるようです。

先生の声

- 学生が自分の将来について、どんな風に考えるかについては、人を呼んで話を聞くといいと思う。呼ぶ人は、学生たちからかけ離れた、華々しく活躍しているような人ではないほうがいい。卒業生で年齢が近い人で、同じ思いを抱きながら、自分で生活ができていく人がいい。
- 必要なことは、将来モデルの提示だと思う。年齢が学生たちに近くて、「ちょっとがんばったら自分もなれそう」というイメージモデルを示してあげたら、立派な生き方よりも、等身大でこういう風な生き方があるんだな」と学生が思えるようなモデル。それは、音楽をやっていて、自立していて、生計もきちんと立てられている、生活人として地に足がついている人。
- 実際には音楽と何か副業をしながら生きている人がほとんどで、そういったロールモデルを早い段階で示す必要がある。

### 身近な人の声を届ける

「学生が将来を考えるヒントを与えるには、どのような方法があると思われますか」とお聞きしました。先生方からは、身近な卒業生や先輩の声を学生に届けることが挙げられました。身近なロールモデルを身近な存在に話してもらうことで、学生に届きやすくなるという意見です。

具体的な方法としては、初年次教育の授業など、入学後の早い時期に卒業生の話を聞く機会を設けるという案や、キャリアを考える機会を一度ではなく、何度か設けることで、学生が気づきを得るきっかけになるのでは、という意見も見られました。

先生の声

- 初年次教育の授業で、卒業生や先輩に体験を話してもらってはどうか。学生のときには「こんなことをしていた」と具体的に話を聞かせてもらおう。学生も、1年生のときに「こんな先輩がいて、こんなことをしていた」ということが記憶にあると、2年間、4年間で目標をもって、「やってみようかな」という気持ちになるだろう。
- 初年次教育の授業で受けたキャリア教育を、それ以降の授業や他の授業と連携させる必要があるのでは、大音の学生にあったキャリアプランやキャリアを考える機会が必要だと思つたので、何度かその機会を提供するといいたいか。
- 学生がいつ将来を考えるかは人それぞれなので、たとえば授業をつくタイミングで何か考えるきっかけを作るといいのでは。
- 卒業生で、音楽教室の講師などで活躍している人を授業などで呼ぶ。ほかに、テレビなどで活躍している卒業生もいる。学生の士気を高めるためにも、身近な先輩像を見せるためにもそういう人を呼んでほしい。

また、大学内で、卒業生や上級生たちと触れ合える場を作ってはどうかという声もありました。学内で授業以外に専攻・コース、学年に関係なく集まることのできる場所があることで、学生のモチベーションが高まるのではという意見です。

## 先生の声

●卒業生が自然と遊びにくるような場所があって、在学生もその場所に来るような習慣があればいいと思う。その場所から卒業してプロで活躍している人とのつながりが生まれる。そうやって、先輩たちに声をかけてもらって、舞台に出演して経験を積み、コミュニケーション力を身につける。そういう経験が卒業してフリーランスとしてやっていく力になるのだと思う。

●将来のことを考えるのであれば、「気持ち」を作る場所が必要だと思う。「世の中に出たら必要だから」というだけで職業訓練をするのではなく、「あの人のようにやってみたい」と思えるようなモチベーションを作る必要がある。授業以外で集まることのできる場所があればいい。

## 必要なスキルを知る

「学生が自分の将来を実現するためにどのようなことが必要でしょうか」と質問しました。先生方の回答は、「必要な能力を認識すること」というものでした。たとえば、音楽教室の講師になるには、自分で教室を開くとしたら、中学校・高等学校の先生になるためには…など将来を見据え、実現するためにそれに向かって力をつけていくことが必要です。しかし、現状ではこれらの力を認識することが難しく、身につける方法がわからない学生がいることも、先生方の回答から伝わってきました。

## 音楽の需要を読む力

「具体的にはどのような力が必要でしょうか」と質問しました。先生方は、講師として、演奏家としてなど、様々な状況で必要な力を挙げてくださいました。回答で多く見られたのは、「技術力」や「アレンジ力」、「その場の対応力」、「需要を読む力」、「教えるための知識」でした。

## 先生の声

●講師として教えるには、伴奏のピアノが弾ける、和音を押さえられるなどの力が必要。あとは簡単なアレンジができるとか、コンピューターを使って楽譜を製作して、印刷してあげられるくらいの力があるといい。

## 先生の声

●将来、レッスンをしたいと考えているのなら、そのための力をつけることが必要。技術はもちろんだが、教える力もつけないと。月謝をいただくのだから、レッスンという商品その分の価値があるものにしないとダメ。習ってよかったと思ってもらえるようにしないとね。

●音楽教室の講師採用試験や、ヤマハのグレード試験を受けるときに、アレンジする、考えて弾くなどの応用力が必要ということも学生もわかっていると思う。しかし、どうやって勉強したらいいかわからない。授業では、構成や人数の関係もあるので、学生自身が努力する必要がある。

●教師になりたい、あるいは留学したいという学生が、そのために必要な力を持っていないことがある。たとえば教育実習に行くのにピアノが弾けない、留学希望なのにその国の言葉を習ったことがないなど。そういったことは、実習に行く前にできるようにしているべきだし、自分の将来に必要な力を学生が把握できるようなキャリア教育ができる、といいと思う。

## まとめ

先生方へのヒアリング調査から、音楽の仕事に就くことの難しさや一般的な就職と違う点、副業という選択肢など、音楽の世界で生きていくことの形が見えてきました。

また、調査から本学の学生が、自分の持つ力や経験を社会と結びつけ、将来を考えるための知識や機会が現在は不足していることも明らかになりました。

このような現状に対し、身近なロールモデルを学生に対して提示していくこと、そのような機会を多く持つことで、学生の気づきへとつながるのではという意見もありました。そして、どのような道を選ぶとしても、生きていくためには、音楽のニーズを読む力をはじめ、たくさん能力が必要となることもわかりました。

## ヒアリング調査を終えて

ヒアリング調査の先生方の回答には、「教員側にも情報発信・共有をしてほしい。教員側が求人の内容などを把握できていると、学生にもアドバイスしやすい」と情報共有を求める意見もありました。ほかにも、他の業界や企業とのつながりを求める声や、「本学の関わりがある企業から人を呼び、音大生の印象や音楽界の現状を話してほしい」といった声もありました。

先生方への情報発信については、ヒアリング調査スタッフとして驚くこともありました。たとえば、「卒業生の声を在學生に伝える」という取組は現在も行っているのですが、そういった活動がうまく伝わっていないことがわかりました。学生だけでなく、先生方にも広く情報を伝えて行くことが、キャリア支援にもつながっていくのだと改めて感じました。

先生方の回答からも、大学内外を問わず、経験を積みながら、社会とつながっていく場所の必要性を感じました。音楽と社会との関わり方については、「音楽で何ができるか」ということを考え続ける視点を持つてほしい」という、音楽のあり方そのものを考えさせられるような回答もありました。

今後、日本語ライティング支援室、キャリア支援センター、音楽の仕事情報館と協働しながら、社会とつながる機会や社会と音楽のあり方を考える機会を提供していきたいと思えます。そして、学生が自身の経験を力として深め、発信できるように支援していきます。ヒアリング調査では、先生方の想い、特に、学生がどのような道を選ぶとしても、自分で考えて選んだ道なら尊重するという先生の暖かさも伝わってきました。貴重なご意見をお聞かせくださった先生方にお礼を申し上げます。

## 先生から学生へのメッセージ

## 音楽との関わり方を考える

音楽でお金を稼いで生活することは簡単ではないけれど、自分と音楽の関わりを仕事のみで考えるのではなく、長く付き合えるものとして広く考えてほしいという声です。

## 先生の声

●クラシック、ジャズにしても、年齢が上がっても続けていてもおかしくないもの。仕事は仕事、演奏は演奏として楽しんでくれれば、と思っている。

●音楽というのは一生自分から離れることはない。音楽を教える立場になっても、自分の演奏はレッスンや学校が終わってから、時間をとって、努力しないと続けられない。それはどんな生活をしていても同じ。音楽というのは自分から切り離せない財産になっているし、努力したことは無駄になっていない。

## 大学外へ出る・経験を積む

大学の外へ積極的に出て、様々な人とふれあい、経験を積んでほしいとの声です。

## 先生の声

●音楽をするには大学の中で事足りてしまうからだろうが、それではダメ。卒業したら外に出ないといけないので、外の世界と関わるような活動をしてほしい。

●小さなイベント、ライブ、演奏会にどんどん出て、経験を積んでほしい。若いうちに失敗して、演奏会で失敗したこと、まずかった部分を覚えておいて、一つずつ直していけばいい。失敗をしないで最初からできた人なんていないんだから。

## 音楽によって培われた経験を見直す

音楽と関わる中で培われた経験や力がどのようなものであるかを認識して、活かしてほしいという声です。

## 先生の声

●大音の子は集中してなにかに打ち込める性質を持っているので、そういう面は企業でも求められている。そういう面をもっとアピールしたらいいと思う。

●練習は嘘をつかない、練習すればできないことができるようになってくる。その喜びを大音の子は知っている。そのためにしんどいことをしないとダメだが、しんどいことをすれば、結果は必ず得られる。それは世の中でも同じことで、音楽で得られたかけがえないもの。

